福澤諭吉記念文明塾　環境教育プログラム　2012 年度　A グループ

最終報告書サマリー

Ⅰ. 課題設定

グループの構成メンバーが最初に持ち寄った問題意識は多岐にわたっていたが、危機感が強い地球温暖化問題を対象として、社会的な対策が遅れていると考えられる生活者の消費における環境配慮行動を促進することを課題として設定した。

Ⅱ. 現状調査と企画立案

まず、課題解決のためのツール案を出し合い、当初案として小学生を対象として商店街を巻き込んだ形式の環境教育プログラムを企画した。この企画立案に関連する幅広い現状認識活動を分担して行い、メンバーの認識を深めた。対象領域は、消費生活に関する環境取組み（グリーンコンシューマー、グリーン購入、エコ表示、CFP 等）、商店街をはじめ大手流通業・商業施設の環境取組み（フィールドワーク：「エコッツェリア」「全国まちづくり商店街サミット」）、日本の環境教育の現状、子供の校外教育活動の実践的知識（フィールドワーク：「NPO 法人アフタースクール」）等である。

調査の結果、グリーンコンシューマーの育成を目的とした買い物の実践型プログラムを開発しようと方向性をもってきたが、安全上の問題を回避するため、教室で模擬店を設置する形態をとることとした。さらに、模擬店の商品は予め用意できるため、環境にやさしい買い物行動のなかでも、ライフサイクル思考（LCA）の概念を体験的に学習する内容にフォーカスすることにした。

LCA について、本プログラムで講義を受けた本藤先生にアドバイスをいただいた。（フィールドワーク：「横浜国立大学本藤教授」）

Ⅲ. 企画内容

学習プログラムの目的と概要

環境問題を自分事化し、子供の消費意識および将来の購買行動の変容を促す。特に、重視することは、自らの消費、購買行動が環境問題低炭素社会の実現･環境問題の解決に繋がるという気づきを付与すること。ライフサイクルアセスメントという環境配慮行動の新たな視点を学習すること。

［学習の型式/ 項目］　Play : 実践体験（買い物ゲーム）＋　Study : 知識習得

［対象学年/ 規模］　小学５・６年　20 名程度

［学習場所/ 時間］　教室。90 分～120 分

プログラムの構成

①買い物に行こう（模擬店）　⇒　②発表（気をつけたこと）　⇒　③炭素量･温暖化ゲーム　⇒　④買い物と環境の解説（ライフサイクル思考、環境にやさしい買い物行動）　⇒　⑤再び買い物に行こう　⇒　⑥気づきを発表

Ⅳ. ツール構成

詳しくは後述するが、主に以下のものを作成・用意した。

［体験］イミテーション、献立例、お金、商品ポップ

［学習］prezi、GC10 箇条

まず「体験」として用意したのが、商品のイミテーションである。より現実性を持たせた購買行動をさせるため、本物に近い外観で作成することを心掛けた。

「学習」として用意したのが、プレゼンテーションツール”prezi”である。1 枚のスライドでストーリー展開が可能であるため ppt よりも子供たちの視覚を楽しませ、理解を容易にするツールであると考えたからである。

Ⅴ. トライアル報告

1. トライアル概要

ツール効果を測定するため、小学生を対象にトライアルを行った。以下に概要を記す。

日時：12 月 1 日　10 時から 12 時

場所：つつじが丘小学校

対象：1 年生から 6 年生までの児童 22 人

内容：「模擬買い物行動を通じて、ライフサイクルアセスメント（LCA）という観点を学び、将来にわたって環境にやさしい購買行動をする人への成長を促す。」

2. 結果

トライアル後アンケートを実施し、以下の回答を得られた。

Q1. 今日は楽しかったですか。　78.3%

Q2. LCA についてわかりましたか。　60.9%

Q3. 今日のお話をおかあさんたちにしてたいと思いますか？　47.8%

Q4. こんどお買いものをする時は、LCA に気をつけようと思いましたか？ 73.9%

反省点すべき点はあるが、「環境」や「CO_2」という言葉にはほぼ全ての子供が理解を示していたことは 1 つの成果として挙げられるのではないかと考える。

3. 改善点

チームの構成、対象者、講義の内容、子供のマネージメント、使用教材にわけて改善点を振り返った。やはり小学生といっても低学年と高学年では理解力と集中力などに差がみられるため、対象を絞ることが必要である。また、CO2 排出量の多い商品が一概に「環境に優しくない」とは言えず、子供たちに現実の購買行動とのバランスを指導することに難しさを覚えた。

Ⅵ. まとめ・今後の展望

運営主体に合わせたツールの進化を図る。

以上